



人工芝コートを雨水で冷却 SDGsに取り組むサッカー場



「スポーツを通じたSDGsへ」

スポーツを通じたSDGsへの貢献は海外では進んでいます。特に先進地のオランダの首都アムステルダムには、100カ所以上の人工芝コートがあり、子どもたちが気軽にサッカーを楽しんでいます。ただ、人工芝は強い日差しを浴びるとアスファルトよりも温度が上昇する弱点があり、その問題を解消するのが、コートの下地に雨水をためて気化熱で人工芝を冷やす設備。夏場は60度にもなる表面温度を4割ほど下げられます。スポーツを通じた、気候変動への具体的な取り組みなどを学び、SDGsについて考えるきっかけを提供します。

FC BASARA HYOGO

元サッカー日本代表の岡崎慎司選手が理事を務める、(一社)Misterが運営する総合型地域スポーツクラブ。2014年には、ドイツ(マインツ)にFC BASARA MAINZを創設。Jリーグ参入はもちろん、グローバルに活躍できる人材の輩出と、地域コミュニティを通じてサステナブルな共生社会を実現を目指している。

プログラムスケジュール例

- 10:00～ MinisterのSGDsの取り組みについて
- 10:30～ ワークショップ
※海外でのSDGsの取り組みや、スポーツを通じたSDGsに関するテーマ
- 11:15～ ピッチ体験
- 11:30 終了

実施場所：Basara Village Green (愛称: BVG)

実施時間：平日 10:00～16:00

所要時間：約1時間30分

実施可能人員：20名

実施費用：1,500円/人

①環境志向

ピッチの下に雨水を貯水できる、オランダの新しいグリーンインフラを導入。真夏の人工芝は最高60度まで上がるとされ、この機能を使えば最大40%カットできるので、ヒートアイランド現象を抑える効果が期待できる。ピッチの表面温度が下がれば、選手は快適で、パフォーマンスも向上する。実際、イングランド・プレミアリーグの名門、リバプールの本拠地アンフィールドにも同じシステムが導入されている。



②防災への取り組み

アムステルダムでは、都市の高温化の抑制に加え、オランダは国の大部分が海拔ゼロ地帯のため、気候変動で増えるゲリラ豪雨や大雨が社会問題になっている。街に水があふれる状況を防ぐため、駅前を中心地ではアスファルトを石畳に張り替え、その下に人工芝と同じシステムを埋め込み、雨水の逃げ場を造っている。また、我々は神戸のスポーツクラブである為、阪神・淡路大震災の教訓を生かし、断水の影響で、トイレなど生活水の確保に困らないよう、非常時になれば、蓄えた雨水を住民に配る災害対応も行う。



③「ひょうごフィールドパビリオン」SDGs体験型地域プログラム

ひょうごフィールドパビリオンは、2025年「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに開催される、大阪・関西万博を舞台に、地域の「活動の現場そのもの(フィールド)」を、地域の方々が主体となって発信し、多くの人に来て、見て、学び、体験していただく取組である。我々のサッカー場も、『SPORTS FOR CLIMATE ACTION～雨水循環型スポーツピッチの取り組み～』として認定をされた。





学習のポイント

- ① スポーツを通じたSDGsを学ぶ
- ② スポーツを通じた防災を学ぶ
- ③ 海外でのSDGsの取り組みを知る



学習の流れ（モデル）

